

すべては 「学校の灯火を消すな！」 から始まった

徳島県美波町 伊座利地区の取組

まちづくり活動部門
研究員 坂本 耕紀

今、学校と地域社会に求められているものは、双方向の協力関係から生まれる魅力ある地域づくりではないだろうか。学校と地域が一体となった取組を進めることで、域外への人材流出に歯止めをかけ、地域の活性化につながっている徳島県美波町の小さな漁村「伊座利」の取組を紹介したい。



「おいでよ海の学校へ」開校式

■伊座利とは

徳島市から南へ約1時間30分。太平洋に面する美波町の東端、入り組んだ海岸線と三方を山に囲まれた小さな漁村集落である。

背後の山が海に迫り、平坦地が殆どない地形条件から、豊富な水産資源を活用した大型定置網をはじめアワビ、サザエ等の海士漁業、小型定置・刺網等の沿岸漁業によって地域社会と経済が成立している。

陸の孤島と称されている同地域は、昭和30年頃のピーク時には400人ほどであった人口が、過疎・少子高齢化の進展により平成4年には100人弱に減少し、それに伴って子ども数が激減。地域の小中併設校「伊座利校」の統廃合が検討され始めた。地域に学校がなくなれば地域が衰退するとの危機感から、地域住民が「学校の灯火を消すな！」を合言葉に交流促進イベントの実施、漁村留学など地

域のシンボルである学校存続のための活動を開始した。

■一日体験留学「おいでよ海の学校へ」

「おいでよ海の学校へ」は、平成11年1月に初開催して以来、今年が13回目である。地域外との交流を主な目的とし、伊座利地域への漁村留学を視野に入れた体験型イベントだが、将来の地域づくりの担い手である青少年の健全育成もねらいの一つとして位置づけられている。

事実、すべて住民手作りのこのイベントを体と心で感じた青少年が、成人して同地域にとどまる例が増えつつある。地域内に雇用の場がなくても、遠方の職場に通勤する若者など、地域に愛着と誇りをもった人材が次世代の地域の心強い後継者として育っている。

特に印象に残ったのが、準備から運営まで全てに通じる段取りの良さである。作業、行動が住民全員の頭の中でマニュアル化されて



海の学校の体験メニュー

おり、一つの目的に向かって住民が感じるまま勝手に動き、手際よく会場が設営されていく。過去12回のイベント実施の経験はもちろんのこと、日常生活における住民相互の関わりを経て醸成された、地域の一体感が色濃く感じられた。

■漁村留学・学校と地域の協働

漁村留学生の受入にあたって、伊座利地区では「儀式」と「条件」を設けている。「儀式」とは、事前に行う三者面談のことであり、留学を希望する児童生徒の保護者、学校、地域が面談し、親の本気度や子どもの順応性を見定めて適正を判断する。また「条件」とは、必ず親も一緒に暮らす



校長先生に伊座利校の活動を伺う



クルージングの船頭は漁業組合長

ており、学校と地域との

「室」との意識が浸透し

は「子どもは地域の

力の中、伊座利に

久しい中、伊座利に

力の下が言われて

地域による子育て

力の下が言われて

困気がうかがえる。

月ともなると野次に負けずに言い

返すようになるとい

ろからも、伊座利の雰

囲気がうかがえる。

力の下が言われて

地域による子育て

力の下が言われて

困気がうかがえる。

月ともなると野次に負けずに言い

返すようになるとい

ろからも、伊座利の雰

囲気がうかがえる。

力の下が言われて

地域による子育て

力の下が言われて

困気がうかがえる。

月ともなると野次に負けずに言い

返すようになるとい

ろからも、伊座利の雰

囲気がうかがえる。



港内の海岸で海水浴

双方向の協力関係が確立されている。

■終わりに

地域のシンボルである伊座利校の統廃合を、住民一人ひとりが自分の問題として捉えた瞬間から、地域は自立に向かって歩み始めた。意識を変えるきっかけは「行政に相手

にされなかったから」と語る、伊座利の未来を考える推進協議会の富田実行委員長。伊座利の方々とお話しすると、何より大切なのは地域自体の磨き上げで、自身自身が魅力を感じる地域を目指すことこそが、結局は域外への人材流出抑止に繋がり、地域力の向上や地域を活性化させる基礎になるのだということを感じさせられる。

様々な活動を通じて培われた地域のエネルギーと、人を惹きつける人間的な魅力に満ち溢れている小さな漁村、伊座利。学校と地域が一体となった現在の魅力ある交流活動の継続や、時代の変化に対応した新しい視点での地域づくりなど、地域内のあらゆる世代が融合した今後の伊座利の活動に注目したい。